

障害児・者に対する差別意識に関する考察 —大学生の意識調査より—

Consideration of a sense of Discrimination against the Handicapped People / Children
—Based on Opinion Survey of University Students—

(2017年3月31日受理)

榎 尾 真佐枝

Masae Makio

Key words : 障害児・者, 差別意識, 障害者差別解消法, 大学生, 障害理解

要 旨

本稿は、大学生が障害児・者に対してどのようなイメージを抱いているのか、そこに差別意識があるのかについて明らかにすることを目的とした。さらに、障害児・者への差別意識は、視聴覚に訴える体験的な講義を受講することで軽減されるのかについても検討を行った。大学生を対象に講義の前後にアンケート調査を実施したところ、大学生が障害児・者に対して差別意識を持っていることが明らかとなった。しかしながら、講義後は約8～9割の学生に意識の変容が見られ、視聴覚に訴える体験的な講義が差別意識解消に有効であることが明らかとなった。また、意識の変容が見られなかった学生に対しては「プラスイメージが持てる直接的な体験」が有効な方法ではないのだろうかという見通しも持つことができた。

1. 問題の所在

障害児・者には迫害されてきた歴史がある。第2次世界大戦終結以前においては、軍隊として戦力になりにくいことや、民族の存続に悪影響を及ぼす可能性があるなどといういわれのない理由が原因となることもあった。また、障害児・者の存在そのものが否定され、社会や地域、時には、恥ずかしい存在として家庭からも排除され、抹消されてきた歴史もある。

第2次世界大戦終結後、障害の有無を超え、全ての人が人として尊重されなければならないという考え方が強くなってきた。1953年には、ノーマライゼーションの理念をバンク・ミケルセンが提唱した。日本においても、その考え方が徐々に浸透し始めた。ノーマライゼーションについて糸賀(1965)は「重い障害があっても人間として生まれ、その人なりの人間になっていく。そして、認めあえる社会をつくろうとすること」と述べている。こ

のように、障害児・者に対する差別と偏見をなくし、障害の有無を超えて共生できる新しい時代を築いていこうという考え方が主流となっていった。ノーマライゼーションの理念を基として、障害児・者の人権や社会参加、そして、自己決定の尊重、自己実現などについて時代とともにさまざまな権利が認められ、障害のある人たちも同じ人として尊重される時代へと変わっていったのである。

しかしながら、2013年に実施された「障害者に対する世論調査」(内閣府)によると、「障害のある人に対し、障害を理由とする差別や偏見はあるか」という問いに対して、「少しはあると思う」人を含めて、89.2%の人が「あると思う」と回答した。約60年前に糸賀が訴えていたノーマライゼーションの考え方が浸透しているとはいえない現状である。このような現状のなか、日本においても2016年4月「障害者差別解消法」(正式名称: 障害を理由とする差別の解消の推進に関する法律)が制定され

た。これは、障害に基づいて不合理な取り扱いを禁止するだけでなく、合理的配慮を提供することを求めるものであり、障害のある人もない人も、ともに暮らしていくことができる社会を目指すものである。

保育や教育機関においても障害者差別解消法に伴い、合理的配慮に関して議論がなされている。養成校においても、学生に障害者に対する合理的配慮の重要性や具体例を示しているところが多い。

それでは、障害者差別に関してはどうか。森(2016)は、「差別と平等」に関して『『不平等はいけない』ともよく言われます。けれども、何が『差別』になるのか、どんな状態をもって『諦めがたい不平等』と言うべきなのか、この点はあまり議論されていません。その結果、ある人にとっては『許しがたい差別』と映る事実が、別の人にとっては『それが当然』と思われる場合もあって、そのままにされていたりします。・・・(略)・・・』と述べている。つまり、議論されなければならないことに目を背けている現状があると示唆しているのである。障害差別に関しても、養成校においてしっかりと議論を重ね、学生が胸に抱いている気持ち・思いを表出し、意識を変容していくことが重要なのである。

宮沢(2013)は「学生に講義前に精神障害者に対するイメージ(印象)を質問したところ、『怖い』またはそれに類する答えを示した人の割合が約8割を占めた。また精神障害者に対する偏見については約6割の人が『ある』と答えた。しかし、背景や経緯を伝える講義をした後、過半数が精神障害者に対する偏見が変化したと回答した」と述べている。

大学の講義では、このように背景や経緯を伝える講義もあるが、学生に体験的に感じてもらう講義方法もある。しかし、障害者差別について体験的な講義を通じて変化の有無を明らかにした研究は見当たらなかった。

2. 研究 目 的

そこで本研究では、大学生が障害児・者に対してどのようなイメージを抱いているのか、そこに差別意識があるのかを明らかにすることを目的とする。さらに、障害児・者への差別意識は、視聴覚に訴える体験的な講義を受講することで軽減されるのかについて検討する。

3. 研 究 方 法

(1) アンケート調査 (実施回数2回)

①調査対象者および実施日

A群	平成27年6月25日	C大学1年生「ボランティア基礎論」受講者
B群	平成28年6月30日	C大学1年生「ボランティア基礎論」受講者

②質問項目

[受講前]

- ・「障害者」とはどんな人だと思いますか。(自由記述)
- ・障害のある人と関わったことがありますか。(二肢択一)
- ・その方はあなたにとってどのような関係の方ですか。(自由記述)

[受講後]

- ・「障害者」とはどんな人だと思いますか。(自由記述)
- ・講義を聞いて障害者に対する印象が変わりましたか。(二肢択一)
- ・今後、障害児・者に関わるボランティアに参加しようと思いますか。(二肢択一)
- ・何か思うことがあれば、自由にお書きください。(自由記述)

③手続き

質問紙は「ボランティア基礎論」の授業開始とともに学生に配付する。講義前に前半の質問に答えてもらい、講義後に後半の質問に再び答えてもらう。授業終了時に全て回収する。

④講義内容

- ・障害の種類とその特徴
- ・障害児・者と学生が関わっている(行事を楽しんでいる)ボランティア場面を、写真、VTRで紹介

(2) 分析方法

二肢択一項目においては、講義前後においてその回答割合をグラフにまとめる。また、自由記述においては、頻出度の高い文言を抽出した後、カテゴリー化して比較する。

4. 研究結果

(1) 対象者について

C大学1年生「ボランティア基礎論」受講者

A群	平成27年6月25日	59人（男8人・女51人）
B群	平成28年6月30日	59人（男11人・女48人）

(2) アンケート調査の回答結果について

図1, 2より「障害のある人と関わったことがある」と回答した学生は, A, B群ともに約8割であった。その内訳は, 学校の友達が圧倒的に多く, 次いでボランティア先の方, 親族と続いていた(図3, 4参照)。学生達にとって比較的身近な人たちに, 障害のある人がいたことが分かった。

続いて, 講義前後における印象の変化については, 図5, 6に示すとおりである。A群では約8割, B群では約9割の学生が「障害者に対する印象が変化した」と回答した。また, 今後, 障害児・者に関わるボランティアに参加したいと回答した学生も, 同じくA群では約9割, B群では約8割いた(図5, 6, 7, 8参照)。

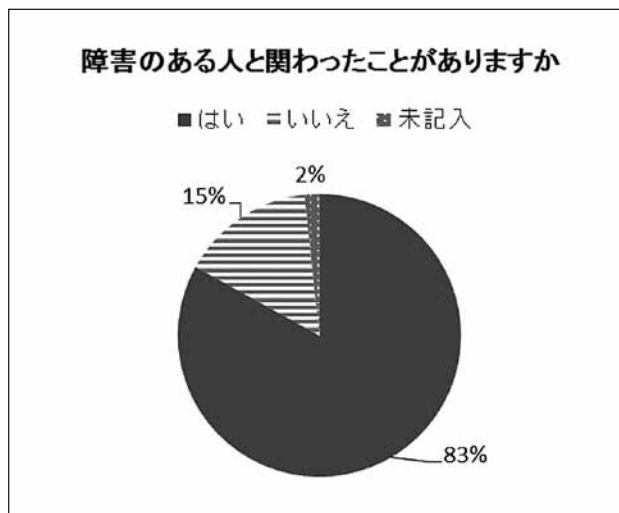


図1 障害のある人と関わったことがありますか (A群結果)

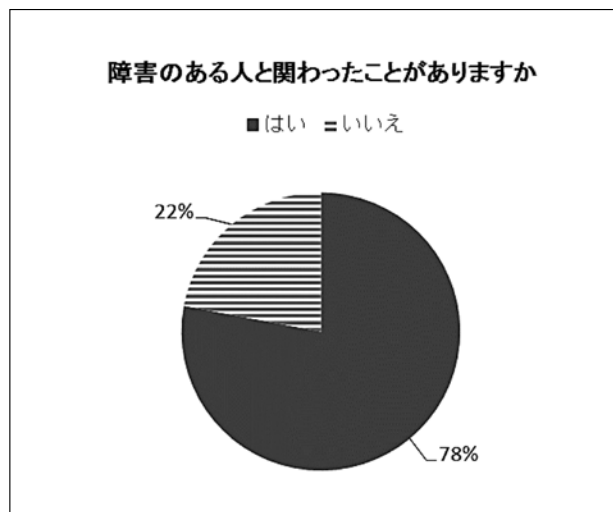


図2 障害のある人と関わったことがありますか (B群結果)

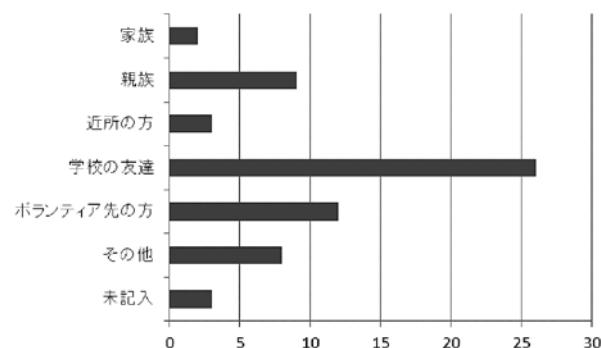


図3 あなたが関わった障害のある人とは誰ですか (A群結果)

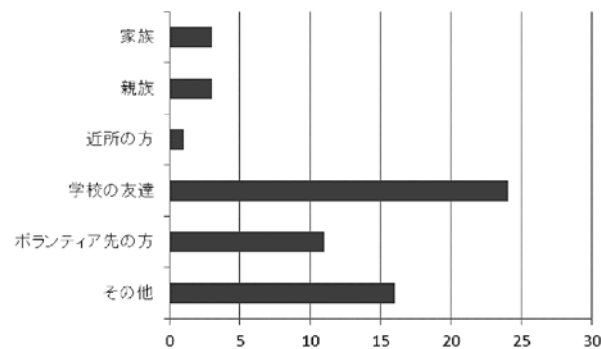


図4 あなたが関わった障害のある人とは誰ですか (B群結果)

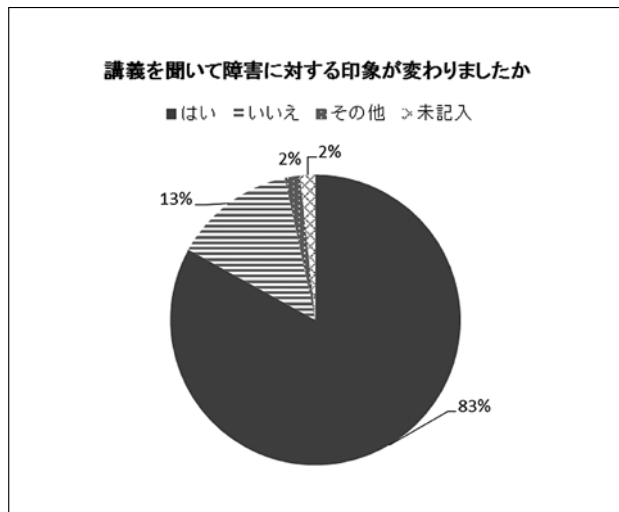


図5 講義後の印象の変化（A群結果）

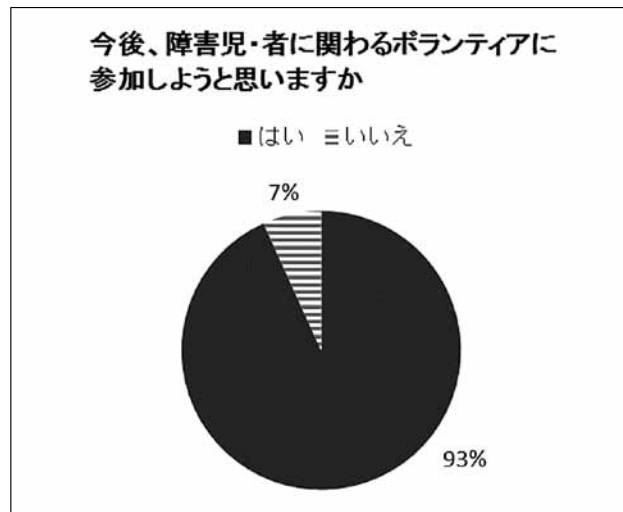


図8 ボランティア参加意思（B群結果）

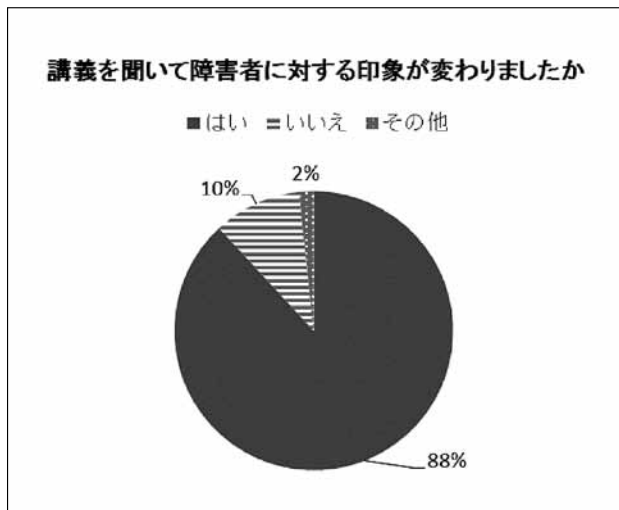


図6 講義後の印象の変化（B群結果）

今後、障害児・者に関わるボランティアに参加しようと思いますか

■はい ■いいえ ■その他 ◇未記入

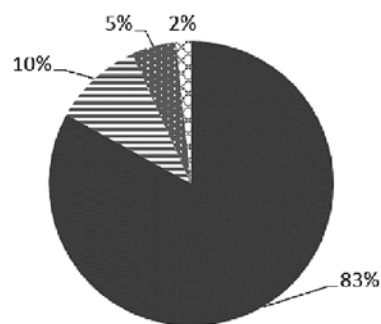


図7 ボランティア参加意思（A群結果）

その具体的な内容についてみると、講義前には、A、B群ともに「不自由」「できない」という文言が圧倒的に多かった。特に、障害児・者は「身体が不自由なため、一人で生活できない」と思っている学生が多かった。少数意見として、「自分とは違う」「怖い」「人に必要な部分が足りていない」「顔つきが違う」などといった意見も見られた（表1参照）。

90分の視聴覚に訴える写真（障害児と学生が一緒になって楽しそうに活動をしている写真、等）やDVD（障害者と学生が一緒にダンスをしている映像、等）を使用した体験的な講義後のアンケート調査の回答では、A群とB群で少し違いが見られた。A群では、障害者は「普通の人（自分たち）と変わらない」「一生懸命努力する人」「生活を楽しんでいる」という印象が変わり、B群では、A群と同じく「普通の人（自分たち）と変わらない」「一生懸命の人」に加え、「見た目だけでは分からない」「正しい理解が必要」と回答し、さらに「支援があれば普通の生活ができる」「地域で暮らしたいと思っている」という回答も多く見られた。逆に、マイナスイメージがぬぐえない学生は、A群では障害児・者を「不自由な人・生活に支障がある人」と捉え、「人の助けがいる」「自分たちと少し違う」という回答となっていた。また「差別意識がある」と回答した学生もいた。B群では「こだわりがある」「コミュニケーションが取りにくい」と捉え、「怖い」という感情がぬぐえない学生がいた（表2参照）。

最後の自由記述の結果については、A、B群ともに「障

害者に関わるボランティアに積極的に参加したい」「理解を深めていきたい」という回答が多く見られた。また「偏見がなくなった」「私たちと変わらない」「支援があれば普通の生活ができる」「障害者も地域で暮らしたい

と思っている」等の回答が見られた。一方「完全に差別の心がなくなったわけではない」「やっぱり怖い」と回答している学生もいた。

表1 講義前の印象について

「障害者ってどんな人」【講義前】＝A群＝

不自由		47
内訳	身体	16
	言語	9
	生活	18

自分（普通の人）と違う	8
関わりたくない	5
怖い	4

できない		17
内訳	一人で生活ができない	9
	自分を制御できない（挙動不審）	5

プラスイメージ	手助けをしたい
マイナスイメージ	どのように接していいか分からない
	人に必要な部分が足りていない

「障害者ってどんな人」【講義前】＝B群＝

不自由		45
内訳	身体	35
	言語	6
	生活	4

自分（普通の人）と違う	10
脳障害	9
発達が遅れている	5
怖い	2

できない		20
内訳	一人で生活ができない	15
	自分を制御できない（挙動不審）	5

プラスイメージ	普通の人と変わらない
	優れた能力を持っている
マイナスイメージ	気を遣わないといけない
	いじめ
	顔つきが違う

表2 講義後の印象について

「障害者ってどんな人」〔講義後〕＝A 群＝

プラスイメージ	普通の人と変わらない	19
	一生懸命な人（努力する人）	13
	かわいい・心がきれい	3
	生活を楽しんでいる	7
	助けがなくても出来ることがある	1
	自分たちと同じ感覚を持っている	1
	怖くない	1

マイナスイメージ	不自由な人・生活に支障がある人	17
	人の助けがいる人	6
	自分たちと少し違う	4
	こだわりが強く、予想できない動きをする	1
	差別意識がある	1

「障害者ってどんな人」〔講義後〕＝B 群＝

プラスイメージ	見た目だけでは分らない	17
	普通の人（自分たち）と変わらない	9
	正しい理解（周りの理解）が必要	7
	支援が必要（支援があれば普通の生活ができる）	6
	地域で暮らしたい（自分たちと同じ生活がしたい）と思っていることを知った	6
	一生懸命の人	6
	自分の意思や考えを持っている	2
	優しい気持ちを持っている	2
	誤解されやすい	2
	それぞれ個性がある	2
	やれば出来る人がたくさんある	1
	あまり不幸ではない	1
	自分の視点を変えたらよい	1
	怖い人ではない	1
	かわいい・素直	1

マイナスイメージ	こだわりがある	3
	コミュニケーションが取りにくい	3
	関わりが難しい	1
	障害は治らない	1
	怖い	1

表3 その他・自由記述の結果

自由記述＝A 群＝

プラスイメージ	障害者に関わるボランティアに積極的に参加したい	11
	偏見がなくなった。イメージが変わった	5
	理解を深めたい。一人一人を理解したい。	7
	人間として私たちと変わらない	4
	普通に接すれば良い	1
	「障害者」と呼ぶことに抵抗がある	1
	将来、障害のある人が社会進出すれば良い	1
	みんなと同じように暮らしたいと思っている	1

マイナスイメージ	完全に差別の心がなくなったわけではない	1
----------	---------------------	---

自由記述＝B 群＝

プラスイメージ	障害者に関わるボランティアに積極的に参加したい	9
	理解を深めたい	11
	見た目だけではわかりにくい	4
	支援があれば普通の生活ができる	4
	障害者も地域で生活したいことを知った	3
	差別がなくなるという	1
	健常者と変わらない	1
	一人一人が大切な人	1
	障害者の見方が変わった	1

マイナスイメージ	障害は治らない	2
	やっぱり怖い	1

5. 考 察

本研究において、大学生が障害児・者に対してどのようなイメージを抱いているのかが明らかとなった。さらに、視聴覚に訴える体験的な講義を受講した後、障害児・者への差別意識が軽減したことが明らかとなった。その具体的な内容について、①障害児・者に対する差別意識について、②受講後の意識変容について、の2つの側面から考察する。

(1) 障害児・者に対する差別意識について

アンケート調査結果より、大学生は障害児・者に対して差別意識を持っていることが明らかとなった。具体的には、障害児・者を「体が不自由で、何も出来ない人」と捉え、その結果「自分たちとは違う」「普通と違う」と思っていた。また、自分たちの経験から障害児・者を「自分を制御できない人（挙動不審）」と捉え、「関わりたくない」「怖い」「人に必要な部分が足りていない」と感じていた。

ただ、約8割の学生が「障害者と関わったことがある」と回答し、その人が身近な人（学校の友達、親族など）であるにも関わらず、このような回答結果になったのは大変残念なことである。本来ならば、障害のある人と関わった際に、障害に対する正しい知識や理解を得ていたならば、また「その人」自身を知って、しっかりと受容していたならば、現在、差別意識は持っていなかったのではないかと考える。

(2) 受講後の意識変容について

90分の視聴覚に訴える体験的な講義を受講した後は、8～9割の学生が「障害児・者に対する印象が変化した」と回答しており、差別意識の軽減ができたことが明らかとなった。具体的には「自分たちと変わらない」「一生懸命努力する人」という見方に変わり、その上で「正しい理解が必要」と回答している。先にも述べたが、つまり、差別意識とは正しい知識や理解がないために発生していると考えられる。また、学生は「支援があれば普通の生活ができる」「地域で私たちと一緒に暮らしたいと思っている」ことにも気づくことができ、正しい知識や理解の上で適切な支援を行い、自分たちとともに生活ができ

るとよいという考え方に至る学生も多く見られた。このことは「障害者差別解消法」が掲げている「障害のある人もない人もともに暮らししていくことができる社会を目指す」という理念に通じるものであり、そこには「合理的配慮が必要」という考えに至ることができているといえる。B群の学生には特にこの意識が強く芽生えたことが伺えた。

また一方で、約1～2割の学生は、講義後も障害児・者に対してのイメージが変わらず「差別の心がなくなったわけではない」「やっぱり怖い」という回答がみられた。この学生達の中には、近所に住んでいる障害者に以前叩かれたことがある等の経験があったため、体験的な講義を受けただけでは意識の変容は得られなかったのである。このことより、障害児・者に対する差別意識を軽減するためには、やはり直接的な体験をすることがより有効なのではないかと考える。つまり、直接、障害のある方と関わり、楽しい時間を共有するなかで障害に対する理解を深めながら、「その人」と関わり、「その人」自身を知ることが、差別意識の解消に繋がっていくと考える。

6. 今 後 の 課 題

法律が整ったからといって、人の心に潜む「差別意識」がすぐになくなるわけではない。差別の本質とは何かを踏まえ、なぜその意識が生まれてくるのか、その原因を明らかにし、正しい知識と理解を自ら得るとともに、さらに障害児・者と直接触れ合いながら、同じ活動や作業をする、生活をともにすることで、障害理解が進み、本当の意味での差別が解消されると考える。1日も早く、そのような時代がくることを願ってやまない。

引用・参考文献

- 今川紗貴 (2016) 『入所施設で生活している障害児・者の人権に関する研究』2016年度中国学園大学こども学部卒業論文。
- 糸賀一雄 (1965) 『この子らを世の光に』 拍樹社
- 糸賀一雄 (1967) 『福祉の思想』 NHKブックス
- 槇尾真佐枝 (2003) 『新たな障がい者支援ネットワークの構築 ～知的発達障がい者を中心として～』 2012

年度中国学園大学大学院子ども学研究科子ども学専攻修士論文.

宮沢和志 (2013) 「精神障害者に対する差別・偏見を軽減するために歴史を伝えることは有効か」『金城学院大学論文集社会学編』9(2).

森実 (2016) 『『差別と平等』をどう学ぶのか?』大阪教育大学

([http://www.pref.osaka.lg.jp/attach/1418/00049258/kyozai_vol.6_p.2-8\(A4\).pdf](http://www.pref.osaka.lg.jp/attach/1418/00049258/kyozai_vol.6_p.2-8(A4).pdf) 2017年 3月29日閲覧)

内閣府 (2013) 「障害を理由とする差別等に関する意識調査の公表について」『平成25年度 障害者に対する世論調査』

(<http://www8.cao.go.jp/shougai/shoushika/tyosa/h21ishiki/pdf/kekka.pdf> 2017年3月29日閲覧)